

ミステリ読書案内

2024. 7. 5 発行元

第587号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

最近出版された本の中から四冊を取り上げてみることにする。取り上げる作家が連続しないようにと気をつけているが、なかなか新刊選びも難しい。ある程度のレベルの高さを保ちたい気持ちも強いので。

新刊の出るスピードが鈍った？

3月後半、4月と出版のスピードが鈍ったような気がするのだが…。書店の新刊コーナーで悩むことも多い。特に単行本に気に入ったものが並んでいない時はがっかり。二千円近いお金を出すのだから、その期待に見合うだけの作品が連続して出てくれると良いのだが。

最近ではネットで新刊案内をチェックしているので、書店に行く前にある程度先は見えているのだが、「是非読んでみたい」と思わせる本

が並んでいけば嬉しい。ということで、今回は少し前の作品も選んでみた。新刊書店では通常買わないことにしている作家で、図書館に納入され、新刊コーナーからよやく一般書棚に移動したもの。もう予約の人も借り終えて、棚に落ち着いた頃の本である。出版されてから一年近く経った頃合い。

「読んでもいいかな」と消極的に思うような作品は図書館にはそれなりにある。まあ、少しずつ読書の幅を拡げていくつもりでと考えている。手を出していない作家を…。

深町秋生「探偵は田園をゆく」

最近の本ではない。昨年2月に光文社から出た本。たまたま図書館で見つけたので…。『探偵は女手ひとつ』の続編。山形県で私立探偵をしている椎奈留美の物語。元警官で、シングルマザーながらに過酷な調査に取り組む姿が読みどころ。事件そのものよりも、留美の必死の努力そのものがテーマといってもよい。山形県は私が過去に住んでいた場所なので、方言もまったく気にならず何の抵抗もなく読み進められる。

今回はホテルの女性従業員から、行方不明になった息子を捜す仕事を依頼される。息子の関係者を調べていくと、地域おこしでやってきて市議会議員に立候補しようとしている人物に出会う。

佐藤青南「ラスト・ヴォイス」

4月に宝島社文庫から出た本。『行動心理捜査官・楯岡絵麻シリーズ』の第11作になる。帯には「シリーズ完結」と書いてあるので最終巻になるのだろうか。

このシリーズは証言者のマイクロジェスチャーから発言内容の真偽を見分けることのできる警視庁捜査一課の刑事で行動心理捜査を得意とする楯岡絵麻(エンマ様)の活躍が見どころである。ペアを組む西野圭介の視点で描かれていることが多い。本書では前作からの流れで、元精神科医で死刑囚の楠木ゆりかが獄中から仕掛けてくる攻撃に西野たちのグループが翻弄されるところから始まる。西野の婚約者の家が放火されることから始まり、事件が続いていく。絵麻も楠木と面会を繰り返すのだが、手掛かりがなかなか得られず…。「ラスト」は？

浅瀬明「卒業のための犯罪プラン」

3月に宝島社文庫から出た本。『このミステリーがすごい!』大賞の文庫グランプリになった作品だという。大学内でのネットなどを活用した経済活動を描いた特殊な設定。

主人公は木津庭商科大学二年生の降町歩。家庭の事情で今年度で大学を卒業しなければならなくなった。この木津庭大学は、大学内での経済活動がポイントとして認められており、ポイントさえ得られていれば飛び級で卒業も可能とのこと。先輩たちからのヒントをもらって、降町が考え出した窮余の一策は…。ちょっと思考力が硬くなってしまった私のような高齢者には考えつかないような展開。騙し騙され…。

斜線堂有紀「プロジェクト・モリアーティ 絶対に成績が上がる塾」

4月に朝日新聞出版の「ナゾノベル」シリーズから出た本。知念実希人のジュヴェナイルが本屋大賞にノミネートされたけれども、児童書のミステリも注目していく必要がある。本書の探偵役は中学校二年生の杜屋譲(もりやゆずる)。題名の「モリアーティ」に結び着いているが、ホームズ譚に出てくるような悪の権化ではない。そして物語の進行役は和登尊(わとたける)でワトソン役になる。

本書では入塾すると「絶対に成績が上がる」と言われている「陽明塾」に潜入する展開となる。塾に通っているクラスメートが追い詰められた様子になるのを見て、杜屋と和登の二人は塾の様子を知るために潜り込むことにする。そこで対面するのが塾長の寺田陽明という人物。その言動たるや…。塾の玄関で電子通信機器等は取り上げられてしまうので、証拠を形に残すことができない。そこで杜屋が考えた作戦は…。ジュヴェナイルにしてはなかなかの迫力で一気に読みさせられてしまう力作。